

# 人生観によるペットロス、ペット葬の関係について

得丸 定子\*・佐藤 英恵\*\*・郷堀 ヨゼフ\*\*\*

(平成21年10月5日受付；平成21年11月12日受理)

## 要 旨

核家族化，個人化の進んでいる現代では，ペットは単なる飼育動物の域を超え「コンパニオン・アニマル」と呼ばれ，その親密な存在の死に伴う「ペットロス」という用語は，学校教育現場でも用いられつつある。ペットの死に伴う感情やその死への関わりは，ティーチャブル・モーメントとして「いのち教育」の好機である。しかし，それらの言葉の背後にある心情やその理解については，十分に認識されていない現状である。ゆえに，いのち教育の一環としてのペットロスについての基礎的知見を得るために，本調査を行った。

結果として，心理尺度では“協同努力型人生観”“多彩型人生観”“信仰型人生観”“金銭重視型人生観”の4因子が抽出された。“協同努力型人生観”は最もペットロスに陥りやすく，“金銭重視型人生観”はペット葬に反対であり，女性の方が男性よりもペットロスに陥りやすい結果が示された。自由記述では，“ペット葬賛成”派が約6割を占めた。“ペット葬反対”派も回答としては反対ではあるが，その記述を考察すると“賛成”派であった。ペット喪失悲嘆から立ち直った契機としては「時間の経過」が最多であり，先行研究で見られない記述として，“ペットについての知識，ペットロスについてあらかじめ勉強しておく，心の準備をしておく”が得られた。

本調査により，人生観や性別とペットロスとの関係性や，ペット葬の必要性への認識，ペット飼育の知識やペットロスについて事前学習の重要性が示され，“いのち教育”の一環としてのペットロス学習の意義が得られた。

## KEY WORDS

pet-loss ペットロス， life & death education いのち教育，  
pet funerals ペット葬， worldview 人生観

## 1. 研究目的

ペットロスとは，“ペットとの死別や生き別れによって生じる悲嘆”<sup>(1)</sup>であるが，わが国ではまだ，その言葉自体や周囲の認識，ケアについてはまだ浸透しておらず，ペットロスに陥った時，人知れず苦しむ場合も多く見られる<sup>(2)-(5)</sup>。『ペットロス110番』を開設している臨床心理士は，“ペットロスの状態から抜け出すためには，悲しみを隠さず表へ出したほうがいい。ところが，“ペットぐらいい”と馬鹿にする人が多いため，我慢せざるを得なくなる。また，男性が悲しんでいる場合“軟弱だ”“情けないやつだ”とからかわれることもある。正常な範囲で経過していたペットロスにもかかわらず，周囲の無理解が，取り返しのつかない事態を招くこともある”と，社会の理解不足を指摘している<sup>(6)</sup>。

このように，ペットロスは理解されにくいものであるが，ペットロスは病気ではなく，最愛のペットを失った人々の耐えきれない寂しさからくる精神状態のことを言う<sup>(7)(8)</sup>。ペットの死にしても，人間の死と同様に受け入れがたいものであり，理屈で受け入れようとしても容易ではなく，理性だけで解決できるほど単純ではない<sup>(9)</sup>。ペットの死に遭遇した場合，ペットを失った悲しみのプロセスとして，否定し，怒り，思いきり悲しみ，受容するというプロセスをたどることが大切なのである。当然ながらこのプロセスは単純な一方方向のベクトルではなく，行きつ戻りつしたり，またスキップしたり，繰り返したりするプロセスを経ることもしばしばである。

ペットロスを軽くし，早く悲しみから立ち直るためには，ペットを失ったショックや悲しみを自分の内面に閉じ込めず，外に出していった方が良く考えられる。人が亡くなった場合は，悲しみを公に表現でき，また悲しみを公然と分かち合える場面が葬儀であろう。ゆえに，ペットロスの心理は愛する家族を失ったときと同じ心理状態であり，ペットといえども葬儀を行うことで，悲しみや後悔など心の痛みを背負いながらも亡くなったペットの思い出とともに生きていこうとする近道になると考えられる。

そこで本調査では，まだ一般的でないペット葬やペットロスについての意識を探るため，大学生を対象に「ペット

\*自然・生活教育学系 \*\*小千谷市立小千谷小学校 \*\*\*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

とペット葬に関するアンケート調査」を実施した。その結果を分析し、生き方観（人生観）とペットロスとの関係、ペットロスへの陥りやすさ、ペット葬の賛否についての知見を得て、「いのち教育」に資することを目的とした。なお、本調査の心理尺度は小・中学生には回答が困難であるため、比較的児童・生徒の年齢に近い大学生を対象に実施し、結果を学校教育に適応させることとした。

## 2. 調査概要

### 2.1 サンプルの概要

本調査は、2005年5月～同年7月にかけて実施した『ペットとペット葬』（無記名、自記式）で、調査会場に直接持参し、アンケートの主旨を口頭で説明後実施した。対象は新潟県J大学生387人で有効回答率は95.6%、内訳は学部1年170人（43.9%）、学部3年142人（66.7%）、大学院1年75人（19.4%）であった。なお、本調査は個人を特定せず、本研究目的にのみ調査票を使用することを口頭と文書で説明し、倫理的配慮を行った。

### 2.2 調査内容

調査内容は、「心理尺度ファイル<sup>(10)</sup>」から抽出した「心理尺度（人生観）」（5件法）39項目を中心に、「性別」（2件法）1項目、「年齢」1項目、「家族構成」（複数選択）1項目、「信仰している宗教の有無」（3件法）1項目、「ペットを失った経験の有無」（2件法）1項目、「ペットの位置づけ」（複数選択）1項目、「ペット葬の賛否」（2件法）1項目、「ペット葬の経験の有無」（2件法）1項目、「ペットを失った時の状況（ペットロス症状）」（5件法）10項目の、計57項目の質問により構成した。これらの項目に加え、ペットロス体験やその立ち直りについて具体的に把握するために、自由記述2項目「ペット葬について」「ペットロスからの立ち直りについて」を設けた。

### 2.3 集計分析方法

集計は、SPSS、および汎用ソフトMicrosoft Excelを用いて行なった。「心理尺度（人生観）」39項目においては、因子分析により因子を抽出し、ここから得られた個々人の因子得点を用いて、因子得点±.40までを中群、それ以上・それ以下を高群・低群にカテゴリー化した。これらのカテゴリーと「ペットを失った時の状況（ペットロス症状）」10項目、「性別」、「信仰している宗教の有無」、「ペット葬の賛否」について有意差を検討した。有意差検定には「比率の差の検定」を用いたが、上記のカテゴリー高群と中群をまとめて「高群」とし、低群と中群をまとめて「低群」として検定を行った。また、「信仰心」は3件法回答であり、「1.ある」を「強い」、「2.ない」を「弱い」とした。「信仰心」が「ない」を、「弱い」という出現率用語で表記した理由は、多くの日本人は「信仰心がない」と断言していても、信仰的行動をとっている場合が多く<sup>(11)</sup>、たとえ「信仰心」が「ない」と答えても実際は無意識的に信仰的行動をとっているため、「信仰心」が「弱い」と表記した。ペット葬については5件法回答であり、「5.とても当てはまる」「4.あてはまる」を「賛成」、「1.全くあてはまらない」「2.あてはまらない」を「反対」と再グループ化後、各因子群と有意差検定を行なった。それらの結果は、1%水準での有意差（ $p < .01$ ）を\*\*で表記し、5%水準での有意差（ $p < .05$ ）を\*で表記した。なお、本分析は欠損値（無回答）を含む個票を除外して処理した。

## 3. 結果および考察

### 3.1 属性

調査対象の性別は、「男性」41.1%（=152人）、「女性」58.9%（=218人）で、年齢は18歳～23歳が96.8%（=358人）、それ以上が3.2%（=12人）であった。

### 3.2 心理尺度の検討

本研究では、「心理尺度（人生観）」39項目について因子分析を行なうため、各項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果または床効果が認められた4項目を除外した35項目を分析の対象とした。

「心理尺度（人生観）」35項目に対して、主成分分析、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転による因子分析を行なった。固有値の変化の様子や各因子の構成項目などから5因子を抽出し、その後、因子負荷量が±.40未満の項目を除外した。因子が尺度として有効であるか否かを判定する際は、因子負荷量が±.40以上の項目に対してCronbachの $\alpha$ 係数を算出し、信頼性を確認した上で用いた。第5因子は $\alpha$ 係数がそれぞれ0.572、0.545と信頼性が不十分であったため除外し、残りの4因子を尺度として用い、各因子名は、第1因子「協同努力型人生観」、第2因

子“多彩型人生観”，第3因子“信仰型人生観”，第4因子“金銭重視型人生観”と命名した（表1）。

表1 心理尺度因子分析結果（主成分分析、バリマックス回転）

項目	第1因子 協同努力型人生観 α=.743	第2因子 多彩型人生観 α=.653	第3因子 信仰型人生観 α=.814	第4因子 金銭重視型人生観 α=.678	共通性	標準偏差
27. 集団や社会に積極的に参加するような生き方をしたい	0.778	0.076	0.046	-0.037	0.639	0.812
42. 人々との協力を社会生活の中心に置いて人生を送りたい	0.737	0.068	0.210	0.067	0.598	0.840
28. 社会生活から遠ざかって控えめに生きたい	-0.717	0.225	-0.017	0.109	0.589	0.908
35. 皆と協調して社会生活を営んでいきたい	0.686	0.187	0.061	0.113	0.534	0.719
19. 集団生活にもっと積極的に参加して生きていきたい	0.610	0.248	0.030	0.031	0.442	0.972
50. 人々と協力したり友情を確かめあえる人生を送りたい	0.577	0.374	0.062	0.094	0.502	0.744
36. 私生活に閉じこもり、自分のための生活がしたい	-0.574	0.222	0.123	0.105	0.443	0.897
52. 努力することによって、人生を実りあるものにしたい	0.552	0.385	0.028	0.046	0.552	0.718
21. 絶えず努力する人間でありたいと思う	0.481	0.452	-0.034	-0.121	0.509	0.802
44. 困難な問題に正面から立ち向かっていく自分になりたい	0.457	0.405	-0.023	-0.120	0.501	0.794
55. 私たちの努力で今の社会をよりよくしてゆきたい	0.417	0.262	0.267	-0.070	0.430	0.850
29. 問題から逃避することなく解決へと努力したい	0.412	0.190	0.045	-0.231	0.375	0.687
22. 特定の生き方にとらわれず、柔軟な生き方をしたい	0.240	0.616	-0.036	0.041	0.480	0.786
30. 人の生き方はさまざまであるから何かに凝り固まって生活したくない	0.119	0.585	-0.027	-0.254	0.446	0.746
43. 自分の時間を多く持って自分自身の生活を充実して生きたい	0.010	0.547	0.006	0.287	0.405	0.779
51. 世の中のことはこだわらずに自然に受け入れて生きたい	0.068	0.539	0.107	0.082	0.330	0.836
45. ひとつのことに片寄って生きたくない	0.345	0.459	0.042	-0.088	0.339	0.869
20. 内面生活を充実させて生きていきたい	0.456	0.457	-0.002	0.061	0.422	0.814
24. 男女の間に真の愛情があればしきたりや世間体など気にするべきではない	-0.073	0.425	-0.092	-0.193	0.233	1.088
47. 政治をよくするためにはもと革新的な勢力を強くしなければならない	-0.041	0.325	0.106	0.069	0.229	0.859
33. 信仰心を持つことで、安らぎや幸せを感じることができる	0.085	-0.090	0.830	-0.046	0.721	1.057
40. 信仰心は、心の拠り所や生きがいとなる	0.003	0.118	0.810	0.055	0.675	1.074
56. 宗教は、人間が正しく生きるための教えを与えてくれる	0.107	0.063	0.769	0.043	0.609	0.905
48. 宗教は、人生観、世界観、価値観の基準を与えてくれる	0.039	0.027	0.761	0.090	0.592	0.969
25. 私は信仰心が強いと思う	0.006	-0.093	0.564	-0.122	0.380	1.036
57. お金は持っていれば持っているほど幸せである	-0.026	-0.010	-0.017	0.726	0.528	1.026
26. 人間は何をするにも先立つものはお金である	-0.097	0.057	-0.087	0.707	0.524	1.012
49. お金があれば心にゆとりが持てる	0.065	0.060	0.004	0.682	0.475	0.930
41. お金は人間を評価するものさしである	-0.071	-0.236	0.145	0.505	0.344	0.968

注1) 各因子群では、因子負荷量0.4以下は削除した

注2) ■は、変数を逆転後、信頼性を算出した

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
固有値	6.515	3.131	2.505	2.037
寄与率	18.614	8.945	7.157	5.819
累積寄与率	18.614	27.560	34.716	40.536

### 3.2.1 4因子と「ペットロス症状」との比較

集計分析方法で記したように因子をカテゴリー化後、これらのカテゴリーと「ペットを失った時の状況（ペットロス症状）」10項目について有意差検定を行い、人生観4因子と「ペットロス症状」がどのように関係しているのかについて考察を試み、表2に一覧として示した。なお、本報告では有意差のあるものだけについて、以下に考察を行った。

第1因子「協同努力型人生観」群の学生は、「ペットを失った時の状況」の質問項目である「あの時こうしていればよかった、という後悔があった」や、「他のペットも亡くなってしまったらどうしようとする不安になる」、「誰かに話を聞いてほしい」、「代わりのペットを飼いたい」において、高群が有意に高い結果を示した。この因子群の人生観は「集団や社会に参加したい」「努力をする人間でありたい」「控えめに生きていきたい（逆転項目）」等であり、周囲の人や状況と協調を保とうとする人生観を持つ。それ故、ペットを失った喪失感の心情を他の人と分かち合い、交流を求めたり、喪失感から来るむなしさを埋めるために他の人との交流で埋め合わせようとするにもかかわらず、努力し育ててかわいがっていたペットが亡くなった時、その責任を自分自身に向けて自分を責め、結果として、喪失感や不安感が強くなったりするのではないかと考えられる。

表2 各因子と「ペットロス症状」

因子名	第1因子 “協同努力型 人生観”		第2因子 “多彩型 人生観”		第3因子 “宗教型 人生観”		第4因子 “金銭重視型 人生観”	
	低 (n=118)	高 (n=109)	低 (n=112)	高 (n=117)	低 (n=123)	高 (n=132)	低 (n=129)	高 (n=133)
ペットロス症状								
あの時こうしていればよかった、という後悔があった(強)	71 Df=1	84** $\chi^2=7.467$	71 Df=1	90* $\chi^2=5.018$	85	93	96	89
他のペットも亡くなってしまったらどうしよう、と不安になる(強)	43 Df=1	58* $\chi^2=6.452$	39 Df=1	61** $\chi^2=6.974$	47	59	58	81
誰かに話を聞いてほしい(強)	46 Df=1	65** $\chi^2=11.567$	54	60	57	76	62	64
代わりのペットを飼いたい(強)	12 Df=1	23* $\chi^2=5.192$	15	18	14	23	8 Df=1	32** $\chi^2=5.018$
ペットを失ったとき睡眠障害になる(強)	18	17	17	25	20	27	18	25
ペットを失ったとき食欲がなくなる(強)	36	32	32	36	34	42	40	36
ペットを失ったとき何もやる気が起こらなくなる(強)	39	38	33	46	38	48	43	45
ペットを失ったとき泣きたければ我慢せずに泣けばよいと思う(強)	108	102	102	110	111	125	122	122
ペットを失ったとき周囲の人は気を遣ったり同情したりしないで欲しい(強)	21	25	19	31	21	27	31	29

\*: P&lt;0.05, \*\*P&lt;0.01

第2因子“多彩型人生観”群は、「あの時こうしていればよかった、という後悔があった」「他のペットも亡くなってしまったらどうしよう、と不安になる」において、“多彩型人生観”高群が有意に高い結果を示した。“多彩型人生観”の学生は「自分自身の生活を充実させて生きていきたい」「柔軟な生き方をしたい」という人生観を持っており、いろいろな生き方を肯定的に捉えており、それゆえ、自分自身においても後悔や不安感を排除せずに、認めているのかもしれない。また、いろいろな生き方を認め、他に干渉をしないという人生観を持つため、他の人との交わりに比較的淡白で、特に喪失感情を他の人に話して分かち合ったりしなくても、柔軟にペットロスを対処できるのではないかと考えられる。

第3因子“信仰型人生観”群は、ペットロスに関する項目すべてにおいて、有意差が見られなかった(表2)。宗教の本質にはスピリチュアリティがあるが、スピリチュアリティを持つ人は悲嘆の乗り越えが容易であると述べられており<sup>(12)</sup>、そのことはこの結果にも表れている。つまり、この人生観群は、大いなる存在を実感し、人生の苦難を肯定的に受け止めることができやすく、ペットが亡くなった喪失感についても、大いなるものとの内面的な対話を通して癒しを得て、ペット喪失から生じる様々なストレスに比較的強く、精神的に安定し、寂しさやむなしさを乗り越えられ易いのもかもしれない。

第4因子“金銭重視型人生観”群は、「代わりのペットを飼いたい」においてのみ高群が有意に高い結果を示した。この因子群の内容項目は「何をするにも先立つものはお金である」「お金は人を評価するものさしである」「お金があれば心にゆとりが持てる」という人生観であり、金銭に重心を置くため、心情的な喪失感には強いのもかもしれない。また、お金を費やして新たなペットを購入することでペットロスから立ち直り、前向きになれると考えられる。

なお、表2の結果を考察するにあたって、各表をより見やすくするために各因子の高群とペットロスの症状に有意に差があらわれたものだけに黒丸をつけた簡略表を作成した(表3)。

表3 4因子と「ペットロス症状」の比較簡略一覧

因子名	協同努力型 人生観	多彩型 人生観	信仰型 人生観	金銭重視型 人生観
ペットロス症状				
「あの時こうしていればよかった」と後悔	●	●		
「他のペットも亡くなったら」と不安	●	●		
誰かに話を聞いてほしい	●			
代わりのペットを飼いたい	●			●

注1) ●は、各因子群とペットロス症状について有意差が認められたもの

3.2.2 4因子と「ペット葬の賛否」との比較

4因子と「ペット葬の賛否」の比較結果一覧を表4に示した。

この項目は、本調査の強い関心事であったが、結果は明瞭ではなかった。つまり、「協同努力型人生観」「多彩型人生観」「信仰型人生観」の3因子群については各高群低群とペット葬の賛否との比較では有意差が見られず、第4因子「金銭重視型人生観」の高い群においてのみ、低い群よりも有意に「ペット葬に反対」であった(表4)。日本消費者協会編集室によるアンケート調査<sup>(13)</sup>によると、今後の葬儀の方向として、派手で過剰な演出をやめて簡素化、質素化を望む声が高まっており、葬儀経験者からは、「費用が高い」「費用内容があいまいで必要以上にお金をかけている」等、費用に関しての不満が集中していると報告されている。ペット葬を行うにしても、世間体や見栄のためではなく自分の気持ちに区切りをつけるためにおこなっていくべきである。また、近年、1家庭あたりのペットにかかる費用は増加傾向にあり、このニーズの増大は、ペット関連の新しいサービス業を成功へと導いている。そのペット関連サービス業の中のペットの葬祭ビジネスが注目されている<sup>(14)</sup>。このペット葬祭業者側においては、事前に消費者に価格表や見積書を公正に提示することが求められる。

表4 各因子群とペット葬の賛否

因子の高低	ペット葬の賛否		
	賛成	反対	N. A.
第1因子「協同努力型人生観」			
低群 (n=75)	45	9	21
高群 (n=75)	50	6	19
第2因子「多彩型人生観」			
低群 (n=84)	54	11	19
高群 (n=80)	54	6	20
第3因子「宗教型人生観」			
低群 (n=84)	51	13	20
高群 (n=85)	55	9	21
第4因子「金銭重視型人生観」			
低群 (n=97)	66	5	26
高群 (n=83)	47	13*	23

\* : P<0.05, \*\*P<0.01

3.2.3 4因子と「信仰心」の比較

「信仰心」の強弱は、人生における様々な喪失からの立ち直りの強弱に関係すると考えられる。よって、人生観4因子と「信仰心」について比較検討を試み、その結果を表5に一覧として示した。

第1因子「協同努力型人生観」高群の学生は、低群の学生より「信仰心」が強い結果であった。この因子群の学生は、人生の様々な出来事に努力を尽くしているが故に、人間の力に限界を感じ、人間を超えた大いなる存在に想いが及び、ひいては「信仰心」の強さにつながるのかもしれない。

第2因子「多彩型人生観」の高い学生は、「信仰心」が弱い結果を示した。この因子群は「自分の内面を充実させたい」「柔軟な生き方をしたい」「しきたりや世間体を気にしたくない」「何にもしばられたくない」という項目の考え方をもつ。つまり、自由で寛容な人生観をもっているといえる。小野寺らの報告<sup>(15)</sup>によると、「信仰心の強い人々は、そうでない人達に対して不寛容になりがちである」という人は44%いると示されている。このことは、信仰者の生き方と一見矛盾するようではあるが、「信仰心」の強い人ほど、信仰教義に不信感を抱かず純粋に護り従い、そうでない人に対して教義の視点から不寛容になることは推測され得る。この報告に照らし合わせると、逆のケースである寛容な「多彩型人生観」高群の人の「信仰心」は、弱いと考えられる。

第3因子「信仰型人生観」を持つ人は「信仰心」が強いということは当然推察され得る。表5の結果に示されてい

るように、「信仰型人生観」の高い人は信仰心が強く、「信仰型人生観」の低い人は信仰心が弱いという結果が得られた。

第4因子「金銭重視型人生観」の高低と「信仰心」の強弱との比較については、本調査では有意差が見られなかった。

また、上記の4因子全てと性別との間には、有意差がみられなかった。

表5 人生観と信仰心

因子別信仰心 (n)	人生観の高低			
	高い	低い		
第1因子「協同努力型人生観」	高 (n=109)	低 (n=118)		
信仰心 弱い	64	68	n.s.	
信仰心 強い	21	11	>	
第2因子「多彩型人生観」	高 (n=117)	低 (n=112)		
信仰心 弱い	70	60	>	
信仰心 強い	22	14	n.s.	
第3因子「宗教型人生観」	高 (n=132)	低 (n=123)		
信仰心 弱い	65	87	<<	
信仰心 強い	29	11	>>	
第4因子「金銭重視型人生観」	高 (n=133)	低 (n=129)		
信仰心 弱い	81	70	n.s.	
信仰心 強い	19	70	n.s.	

表中の<<, >>は $p < .01$ を, <, >は $p < .05$ を示す

### 3.3 「性別」と「ペットとの死別経験」「ペットロス症状」「信仰心」「ペット葬の賛否」との比較

これらの結果を表6に一覧として示した。

「性別」と「ペットロス症状」の比較については、女性のほうが男性よりも多くの項目で有意に高い結果であった。この点については、川島らの調査結果でも同様な結果が示されている<sup>(16)</sup>。また、小・中学生において、「死などの物事を女子のほうが感情的に捉えるのに対して、男子は即物的でクールなイメージが強い」という報告がある<sup>(17)</sup>。しかし、本来、人間として男女ともに悲しみの感情は同じ様に出てくると考えられるが、現代でも「男は強くあれ」「男は泣くな」というジェンダーバイアス的な価値観や子育て観がまだ根強く残っていることが影響し、悲しみの感情を認めたり表出したりすることに、男女差があると考えられる。ゆえに、男性は無意識のうちに情緒面でのストレスを抱え込んでいるとも考えられ、子どもの段階から性別を問わず個々人にあったグリーフケアが求められる。

「性別」と「信仰心」との比較では、男性よりも女性の方が「信仰心」は弱いという人が多い結果が得られた。上節3.2.3で述べたように、「信仰心」とペットロスとの関係が深いと考え、また、女性の方が「信仰心」は強いだろうとの推測を立て、両者を比較した。「信仰心」とペットロス症状の関係は上記3.2.3で述べているが、女性の方が「信仰心」は強いだろうとの推測は否定された。しかし、本調査では「信仰心」という大きな言葉の枠組みで調査したが、河野ら<sup>(18)</sup>、「信仰心・宗教観」をさらに精密に分類し、宗教観を4つの尺度「向宗教性」「加護観念」「靈魂観念」「近代合理主義」に分類し調査した。その結果によると、「靈魂観念」だけに女性のほうが有意に高いという結果となり、他の3つの尺度では男女差は出ていないという報告を行っている。また、小野寺ら<sup>(19)</sup>の世論調査レポートによると、信仰する宗教について、若い世代では男女差が示されないが、年齢が上がるにつれて女性のほうが男性よりも「信仰心」が強くなっていく結果を報告している。このように、「性別」と「信仰心」についての調査は種々の

結果が示されているが、本調査では若い世代を対象としており、小野寺らの報告と調査対象年齢が類似しているの  
で、本調査対象者は将来的に、女性のほうが「信仰心」が強くなっていくとも推測される。

「性別」と「ペット葬の賛否」との比較には優位差は認められなかった。

表6 性別と「ペットを失った経験の有無」「ペットロス症状」「信仰」「ペット葬の賛否」

項目	内容	性別	
		男 n=152	女 n=218
ペットを失った経験	有り	93	153
	なし	59	65
ペットロス症状	あの時こうしていればよかった、という後悔があった (強)	100	158
	他のペットも亡くなってしまったらどうしよう、と不安になる (強)	52	111**
	誰かに話を聴いてほしい (強)	76	113
	代替りのペットを飼いたい (強)	23	36
	ペットを失ったとき睡眠障害になる (強)	25	38
	ペットを失ったとき食欲がなくなる (強)	35	76*
	ペットを失ったとき何もやる気が起こらなくなる (強)	37	90**
	ペットを失ったとき泣きたければ我慢せずに泣けばよいと思う (強)	136	208*
ペットを失ったとき周囲の人は気を遣ったり同情したりしないで欲しい (強)	35	41	
信仰心	弱い	101	111**
	強い	19	35
ペット葬の賛否	賛成	63	90
	反対	12	15

\* : P<0.05, \*\*P<0.01

### 3.4 自由記述

本調査用紙の最後の自由記述欄は「葬儀について、あなたが思うことを何でも書いてください」「ペットを亡くした悲しみから立ち直ったきっかけがあれば教えてください」の2項目で、任意回答とした。387人中215人からの回答を得て、それらをカテゴリー分類し検討した。なお、数字は回答数ではあるが、一人の回答者が複数の内容を記入しているケースもあり、延べ回答数として数えてある。

#### 3.4.1 ペット葬について

“ペットの葬儀について、あなたが思うことを何でも書いてください”という自由記述の回答内容を、賛否に分類し、表7に示した。

その結果を見ると、「賛成」が約6割を占めた。次に多かった回答は「葬儀をやるやらないは本人の自由だ、やるにせよやらないにせよ変わらない」という記述であり、はっきり「反対」の意見を述べている回答はわずか約1割であった。しかしながら、ペット葬の賛否については同様な質問を自由記述でない質問項目で問うており、その結果を上記3.2.2で述べているが、5件法で賛否の回答を求めると、「金銭重視型人生観」の人のみ「反対」が多く、他は賛否の回答は半々であった。僅かな相違であるものの、このことはアンケート調査の限界であり、それゆえに、多角的に分析検討することが求められるのであろう。以下に、自由記述の詳細について紹介

表7 自由記述 ペット葬の賛否

記述内容	回答数 (%)
賛成	126 (61)
本人の自由、どちらでもない	50 (24)
反対	18 (9)
わからない	6 (3)
その他	7 (3)
合計	207(100)

する。

まず、ペット葬「賛成」記述について述べる。

記述として「ペットは家族（人間）と同じだから（46%）」「自分、または家族の気持ちの整理ができる（12%）」「ペットのため（8%）」「いのち」について考える機会になる（2%）」等である。また、『賛成』の意見の中には条件付けで「賛成」意見を述べている人もいた。例えば「セレモニーホールを借りる等、盛大にはやらなくてもいい（8%）」「亡くなったペットの種類によっては、葬儀はしない（0.8%）」「ペット葬をすることによって心の整理がついて立ち直れるのなら（0.8%）」「何十万円もかけて葬儀をする人の気持ちはわからない（0.8%）」などである。

また、ペット葬「賛成」理由をカテゴリー分類すると、最も多い回答として約半数が「ペットは家族（人間）と同じだから」と記述されており、ペットは家族または人間と同じように感じているということがわかった。犬を飼うのは番犬のためというのが多かった以前の意識に比べ、現代ではペットの存在意義や価値、役割が変わり、家族や社会の一員という意味の「コンパニオン・アニマル」や「伴侶動物」と呼ばれるようになり、「家族」はもちろん「息子」や「娘」といった擬人化した表現を用いられるようになってきている<sup>(20)-(23)</sup>ことが本結果でも示されている。ペットを家族や人間など、擬人化した対象で見ているという結果に関しては、味の素ゼネラルフーズ「あなたとペットとの仲間柄」についてのアンケート調査<sup>(23)</sup>や、朝比奈<sup>(24)</sup>の「生前のペットの位置づけ」についてのアンケート調査でも同様の結果が示されている。擬人化しているがゆえに、人間を弔う気持ちと同じ心情を持ち、ペット葬に「賛成」しているのであろう。

二番目に多い「賛成」理由として、「葬儀をすることによって気持ちの整理ができる」という回答が得られた。葬儀を行う効用は多くの文献に書かれている<sup>(25)-(28)</sup>。つまり、死んだペットにきちんと“さようなら”を言うことができ、ペットが死んだという事実を受け止められる。そしてペットとの思い出と共に生きていこうと思えるようになる。さらに、葬儀をすることにより忙しくなり、忙しく体を動かしているうちに気持ちは紛れ、体が疲れるとぐっすり眠れて精神的な回復も早くなるということである。このように、本調査でも文献と符合する結果が得られた。

さらに、条件付き「賛成」についてであるが、「セレモニーホールやペット霊園を使用しようとする」と、経済的負担がかかる。自宅の庭に埋葬し、自分で墓を作れば実質的に費用がかからない。また、自宅の庭に埋葬すれば、愛したペットを身近においておけるのでいつでも好きなときに墓を訪れて思い出に浸ることができる。庭に咲いている花で墓を飾ることもできれば、ペットが生前慣れ親しんだ場所に埋葬することもできる<sup>(29)</sup>というような心理から「盛大にはやらなくてよい」と記述したのであろう。これらの心情は支持できるものであり、葬儀産業の利益に消費者として加担する必要はない。しかし、このような心情をうまく捉えた利益優先のペット葬儀産業が現在増加しつつあることは確かである<sup>(30)</sup>。

次に、ペット葬「反対」記述を分類した。

反対の記述数は僅か10%弱（記述数18、表7）であるため内訳の回答数は示していない。

「反対」の理由として、「ペットを擬人化して扱うのはおかしい」「お金がかかる」「感傷をあおるだけである」「葬儀という形ではなく、気持ちで表すべきである」が記されていた。ペットを「擬人的役割」として共に過ごしている人ほど深刻なペッロスに陥りやすいことは多くの文献に書かれている。逆に、ペットを擬人化して考えない人はペッロスに陥りにくく、その悲嘆回復手だてとしてのペット葬の必要性を感じないと考えられる。「お金がかかるからペット葬は反対」という人については、「単にお金の問題であり、自宅に埋葬するという弔いに賛成」という記述が続いている場合、この「反対」回答は、転じて、ペット葬に「賛成」派となる。「感傷をあおるだけだから葬儀には反対」という記述は、ペッロスについての理解不足の一例である。ペットがいつも傍らにいて、日常生活を共にしていたペットがいなくなってしまった場合、悲しむことは当然である。悲しみの感情は苦しいものであるが、ペットを失った悲しみを受け止め、感じ、対峙するということは、心、精神的成長には、重要な要素でもある。また、悲嘆プロセスの一段階として、“思いきり悲しむ”ことは悲嘆を乗り越え、次のステップに進む過程として、必要なことである<sup>(31)-(33)</sup>。しかし、この記述のように、ペッロスへの理解の薄い人から見るとペット葬は「感傷に陥っている」「感傷をあおる」と思えるかもしれないが、ペット葬儀は心理学的にも裏付けられた「感傷を乗り越える」「ペッロスを重篤化させない」ための公認の機会である。

最後に、条件付き葬儀反対回答について考察する。

「葬儀という形ではなく、気持ちで表すべきである」という記述は、正統派でもっともな回答である。ペットを失った時、ほとぼしる感情やペットとの楽しかった思い出を詩や手紙として記すことは悲しみを和らげ、気持ちを整理できる効果がある<sup>(34)-(36)</sup>。しかし、この「悲しみの気持ちを表す」ために、詩を作り手紙を書くという行為は、葬儀そのものである。ゆえに、葬儀を「お金のかかる、儀式的なもの」と固定的に捉えずに、場所や方法を問わず、



ペットの死を悼み、悲しみの「気持ちをあらわす」場や機会と捉え直せば、その行為は、本来の意味での「葬儀」となる。この意味からすると、この記述は転じて、葬儀「賛成」派となる。

以上のように、本調査での全てのペット葬「反対」派は、その真意はペット葬「賛成」という回答に転じ、結論として、本来の意味での「ペット葬」に全員賛成という結果が導き出される。

### 3.4.2 ペットをなくした悲しみからの立ち直りのきっかけについて

この集計結果を表8に示した。

悲しみを克服したきっかけとして最も多く得られた回答は「時間の経過」「自然と」「特にない」であった。同様の結果は川島らの調査結果<sup>(37)</sup>でも報告されている。悲しみが癒えていく過程は人それぞれだが、どんな対処法を用いてもペットロスの悲しみや苦しみを魔法のように一夜にして消える方法は存在しない。ペットロスの強弱はそれぞれであり、悲嘆がペットの死後数日で終わる人もいるし、数週から数ヶ月に及ぶ人もいる<sup>(38)-(40)</sup>。またこの「時間の経過」の解決方法は、援助が得られにくいことの裏返しとも解釈できる。ペットロスが重篤化しないためのケア対策は今後の課題でもある。

二番目に多かった回答は、「新しいペットを飼った」であった。川島らの調査結果でも同様である。しかし、「時間の経過」と答えた学生は52%に対し、「新しいペットを飼った」と答えた学生は10%と少ないことから、「新しいペットを飼う」立ち直り派は少数である。亡くなったペットに対する罪悪感が生じたり、新しいペットもまた死んでしまったりするのではないかと恐れを抱いて飼えない人もいる。さらに、ペットの死の直後にやってきた新しいペットはいわば「侵略者」となり、敵意や憎悪さえ抱いてしまうことがある<sup>(41)(42)</sup>。逆に「新しいペットを飼いたい」と考える人は、「代替のもの」が必要なわけではなく、ペットという存在や、そこから得られる安らぎを求めているものと考えられる。

今回の調査で新たに出てきた記述として少数ではあるが「あらかじめ勉強しておく、心の準備をしておく」がある。ペットの死に先立って心の準備をすることは困難であるが、死を迎えたときの葬い方を考えておくことで、死別への対処がずいぶんと楽になる<sup>(43)</sup>。西宮は、ペットロスの体験過程を準備期、衝撃期、悲痛期、回復期及び立ち直った後の再生期の5段階に分けており、「準備期」が長いほうが好ましく、心の準備がない人のほうが重篤なペットロスに陥りやすいと述べている<sup>(44)</sup>。ゆえに、ペットの寿命は人間よりも短いということを前もって勉強し、必ず死別するときが来るという心の準備は推奨される。例えば、人間の寿命は70～90年であるのに対し、犬、猫は17～18年、ハムスターは2～3年、セキセイインコは12年である<sup>(45)</sup>。さらに、ペットロスに陥ること事態は異常ではないこと、またペットロスからの立ち直り方を学習することは特に小学校からの教育において望まれる。

表8 ペットをなくした悲しみからの立ち直りのきっかけ

項目	記述数 (%)
時間の経過, 自然と, 特にない	58 (52)
新しいペットを飼った (他のペットを大事にする)	11 (10)
家族や友人と一緒に過ごす, 話す	10 (9)
信条を持つ, 努力する	7 (6)
あらかじめ勉強しておく, 心の準備をしておく	5 (5)
事実を受け入れた, 仕方ないとあきらめた	4 (4)
泣いた	4 (4)
埋葬する, 思い出をふり返る, 思い出の品(写真など)を大切にする	2 (2)
新しいペットは飼わない, 立ち直っていない	2 (2)
そのペットのことを話さないようにする, 忘れようとする	1 (1)
その他	6 (5)
合計	110(100)

#### 4. 結 語

ペットの存在が大きな意味を占める現代において、学校教育や社会教育で、ペットロスについての学習機会を設けることの意義は大きい。5年ほど前であるが、筆者が訪問した米国アイオワ市での葬祭施設では、葬祭業者が大学の教員と連携をとり、ペットロスセミナーを開催していた<sup>(46)</sup>。わが国でも遠からず、種々な教育機関と諸組織が協力することによりペットロスについての認識や学習機会が広まると考えられる。また、そのようになることを願っている。

#### 引用文献

- (1) 朝日新聞社 (2005) 『朝日現代用語 知恵蔵2005』朝日新聞社, 東京, p1035.
- (2) 鷺巣月美編 (1998.10.5) 『ペットの死, その時あなたは』三省堂, 東京, p2-7.
- (3) 西宮三代 (1997.9.30) 『ペット・ロス』誠文堂新光社, 東京, p2-4.
- (4) 前掲(3) p46-63.
- (5) モイラ・アンダーソン (2001.5.25) 『ペットロスの心理学』メディカルサイエンス社, 東京, p3-6.
- (6) 宮島英紀 (1998.8) 急増! 「ペットロス」で人生を狂わす人々 『現代』講談社p230-239.
- (7) 三平三郎 (1998.6.24) 異常ブーム「ペット」は警告する! 『SAPIO』p20.
- (8) 石井万寿美 (2005.10.28) 『ペットロスの処方箋』コスモヒルズ, 東京, p4.
- (9) 前掲(3) p20.
- (10) 堀洋道等編 (2000.4.30) 『人間と社会を測る 心理尺度ファイル』堀内出版, 東京, p422-426.
- (11) 小野寺典子 (1999.5) 世論調査レポート 『日本人の宗教意識～ISSP国際比較調査, 日本の結果から～』放送研究と調査, p56-57.
- (12) カール・ベッカー編著 (2009.1.30) 『愛する者の死とどう向き合うかー悲嘆の癒しー』晃洋書房, 京都, p53-54.
- (13) 消費者情報 (1996.11) No.276 『今, どんな葬儀が望まれているかーアンケート調査結果からー』p14-15.
- (14) 株式会社JPR編 (2009) 『ペット葬儀, 霊園市場の現状と将来展望』(株)JPR, 東京.
- (15) 前掲(11) p59.
- (16) 川島名美子 修士論文 『ペットとペットロスに関する比較文化的一考察』p60-61.
- (17) 稲村 博, 小川捷之 (1983) 『死の意識』共立出版, 東京, p71.
- (18) 河野由美 (2000) 飯田女子短期大学紀要, 第17集 『大学生の宗教観と死観及び視の不安に関する計量的研究』p73-87.
- (19) 前掲(11) p54.
- (20) 宇都宮直子 (1999) 『ペットと日本人』文春新書, 東京, p4-6.
- (21) 前掲(20) p107-142.
- (22) 前掲(8) p21-34.
- (23) 杉田陽出 (2001) なぜ人はペットの死を悲しむのか----ペットロスに見られる人と動物の関係, 大阪商業大学論集 p41-56.
- (24) 朝比奈千恵 青少年期における飼育動物の喪失(ペットロス)体験に関する探索的研究p181-194.
- (25) 前掲(8) p119-138.
- (26) 田村博昭訳 (2004.11.15) 『ペットロスー家族動物の死を見つめてー』文芸社, 東京, p117-124.
- (27) 前掲(6) p230-239.
- (28) エリック・ローフス (1987) 『子供たちにとって死とは?』p67-93.
- (29) モイラ・アンダーソン (2001.5.25) 『ペットロスの心理学ー悲しみを癒すための手立て』メディカルサイエンス社, 東京, p134-136.
- (30) 藤吉雅春 (1998.6.24) 2000年には1兆円! ペット産業の「モラルなき拡大」トラブル集 SAPIO, p17-19.
- (31) 前掲(8) p3-5.
- (32) 前掲(26) p25.
- (33) 前掲(26).
- (34) 前掲(24) p44-52.
- (35) 前掲(8) p119-138.
- (36) 前掲(28) p116-124.
- (37) 前掲(16) p91-99.
- (38) 前掲(6) p39-62.
- (39) 前掲(26) p53-56.
- (40) 前掲(8) p6.

- (41) 前掲(8) p132-138.
- (42) 前掲(29) p89-108.
- (43) 前掲(29) p48-50.
- (44) 前掲(3) p50-55.
- (45) <http://www16.ocn.ne.jp/~keiani/pet/pet.html>.
- (46) 『Coralville Iowa City Animal Regulations』 Iowa City Animal Services.

# Student Worldviews' Influence on Pet Loss and Pet Funerals

Sadako TOKUMARU\* · Hanae SATO\*\* · Josef GOHORI\*\*\*

## ABSTRACT

Japanese living alone or in nuclear families have begun to think of pets more as "companions" than as mere animals. The death of companion animals occasions "pet loss"--a term increasingly used in school settings--that creates "teachable moments" eminently amenable to education about life and death. However, the emotions and worldviews underlying "pet loss" are not yet adequately understood. This survey was designed to acquire basic knowledge about pet-loss for its relevance to life and death education.

Our psychological survey divided students' worldviews into four types: cooperative self-reliant, variable type, pious, and money-reliant. The cooperative self-reliant type showed more grief at the loss of a pet, as did females. Roughly 60% agreed with the value of pet funerals; this number was even greater when we scrutinized their open-ended comments. The pecuniary type most tended to oppose pet funerals. For recovery from grief at the loss of a pet, "passage of time" was the most often cited reason, but "prior study of pets and pet loss," and "mental preparedness for the death of a pet," were given as reasons that have not appeared in earlier research.

This study related students' pet-loss to their worldviews, gender, valuing of pet funerals, and prior study of pets and pet loss. It suggests that the study of pets and pet loss can be an important aspect of education about life and death.

## KEY WORDS

pet-loss, pet funerals, life and death education, worldview

---

\* Natural and Living Science    \*\* Ojiya Elementary School

\*\*\* The Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education (Ph. D. Program)